

将棋プロ棋士の棋風考察

米長 泰・福島 琢巳*

Some Consideration of Professional Shogi Player's Thought Pattern

Yasushi YONENAGA and Takumi FUKUSIMA

(1996年11月29日受理)

Professional shogi players have very forceful personalities and thought patterns themselves. Indeed it seemed rough that an amateur adopted them to analyse some accidents, however he tried to combine them and QC methods, which is one of analytical methods. He could obtain a solution and decided to present the results.

1. はじめに

将棋は囲碁と同様であるが、プロでもアマでも、それぞれ個性がある。ときには与えられた場面で最善の手順が「定跡」として確立している場合があるし、詰将棋には絶対的な一手順しか存在していないから、突き詰めると何か固定された最善手があるような気もするが、不思議に「個性」が存在している。それを人々は「棋風」と表現している。或いは野球やサッカーのようなスポーツにも「チームカラー」が感じられている。

本文では将棋の棋風を取り上げた。対象として、平成6年度の第53期A級順位戦を選んだ。理由としては、棋士10人が全く対等な条件で、他のどの棋戦よりも真剣に全力投球するから、元データに信頼性があると考えられる。また全力を注ぐ過程で本来の棋風が強く滲み出てくるのが、想定できる。ただ棋界の第一人者である羽生善治5冠王が登場しないのは、誠に残念である。

次に分析手法であるが、筆者(米長)の是までの研究実績から、QC手法取り分け主成分分析法を駆使して分析に当たることとした。但し評価メジャーとなると百人百色でいろいろな方法が考案されると思われるが、本文では将棋の各駒を動かす回数という単純なものに着眼した。

他にもっと高度な評価メジャーが存在しているかも知れないが、まず第一歩としての研究成果を報告

したい。

2. 第53期A級順位戦の状況と棋士紹介

A級には10人の定員枠があり、毎年2人が陥落する。逆に優勝者が名人に挑戦するシステムである。だからどんなに強くても、A級棋士にならなければ名人にはなれない。羽生(以下各棋士の敬称略)は一時7冠王となったが、「名人」位は他の6冠を合わせたものより、価値がある。

学校と比較してみると、校長が名人、教授がA級、助教授がB級、助手がC級であろうか。但し原稿料や講演料などの副収入がヤケに多く、コマーシャルへの登場も許される。従って若手の助手が年配の教授に倍する収入を得ることも夢ではない。反対にウカカしていると、校長といえども助教授以下に降格する危険性がある。まさに海千山千の世界だといえよう。

53期A級順位戦の成績は表1のとおりである。資料は「平成7年版将棋年鑑」(文献1)よりコピーした。順位とはスタート前に前年度実績により、予め決められている。下位同率の場合は順位が下の棋士が降級するから、順位は星一つの差がある。だから優勝にも降級にも関係なくとも、全力を尽くすのである。

本リーグ戦では森下と中原が同率でプレーオフの結果、森下が優勝した。反対に降級したのは塚田と南である。

次にこの10棋士の通説的な棋風を紹介する。表2

* 秋田高専本科学学生(将棋部員)

将棋プロ棋士の棋風考察

表1 第53期 A 級順位戦成績表

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	順位
八段	八段	九段	九段	八段	九段	九段	永世十段	王将	前名人	段位
森下	島	南	加藤	塚田	有吉	高橋	中原	谷川	米長	氏名
卓	朗	芳一	一二三	泰明	道夫	道雄	誠	浩司	邦雄	
花村 28 福岡	高柳 32 東京	木下晃 31 大阪	南口 55 福岡	大内 30 東京	大山 59 岡山	佐瀬 34 東京	高柳 47 宮城	若松 33 兵庫	佐瀬 51 山梨	師匠 年齢 出身
○ 有吉	○ 塚田	● 谷川	○ 高橋	● 島	● 森下	● 加藤	● 米長	○ 南	○ 中原	1
○ 谷川	○ 南	● 島	● 塚田	○ 加藤	● 中原	● 米長	○ 有吉	● 森下	○ 高橋	2
● 米長	○ 有吉	● 高橋	● 中原	● 谷川	● 島	○ 南	○ 加藤	○ 塚田	○ 森下	3
○ 塚田	● 中原	● 加藤	○ 南	● 森下	● 米長	● 谷川	○ 島	○ 高橋	○ 有吉	4
○ 南	○ 米長	● 森下	● 谷川	○ 有吉	● 塚田	● 中原	○ 高橋	○ 加藤	● 島	5
○ 島	● 森下	● 有吉	○ 米長	○ 高橋	○ 南	● 塚田	○ 谷川	● 中原	● 加藤	6
○ 中原	● 高橋	○ 塚田	● 有吉	● 南	○ 加藤	○ 島	● 森下	○ 米長	● 谷川	7
○ 加藤	● 谷川	● 米長	● 森下	● 中原	● 高橋	○ 有吉	○ 塚田	○ 島	○ 南	8
● 高橋	● 加藤	● 中原	○ 島	● 米長	○ 谷川	○ 森下	○ 南	● 有吉	○ 塚田	9

に概要を示すから、参照されたい。順位の順に、米長（泥沼棋士）は「泥沼流」と言われている。プロ棋士は全員が基本定跡に精通しているわけだからまじめに指していたら、差がつかないというのである。だからわざと定型を崩して、非定型の泥沼に誘い込んで勝負を決着させようとするもの。但し性格は明るいので「さわやか流」と、逆のニックネームを頂戴している。

谷川は攻撃精神が旺盛で「前進流」と言われている。また王様（玉・ギョクという）を追い詰める段階で強手や妙手を連発して鮮やかに収束させることから「光速の寄せ」という異名がある。

中原はアマもプロも皆がなるほどどうなずくような、最善手を指すことから「自然流」と呼ばれている。まるで水が高きから低きへ自然に流れ落ちるように、なんの不快感もなく局面が流れていくのである。やはり至芸のひとつであろう。

高橋は泥沼棋士と師匠が同じで弟子である。非

常にまじめで礼儀正しく、またあまり華やかに目立つこともなく、いつの間にか A 級まで上り詰めた。これら一連の生活行動を総称して「地道流」と呼ばれている。

有吉は当期残留したから、60歳で A 級棋士ということになる。これは凡人には到底達成出来ない偉業である。しかも将棋に賭ける情熱は凄まじく、棋風は青春のように、若々しく燃えている。そこで人々は「火の玉流」と囃している。

塚田には特別の流儀はない。とにかく攻め100%の棋風である。将棋の戦法にあまり常道ではないが「横歩取り戦法」とか「ひねり飛車戦法」がある。これらを絡めて「塚田スペシャル」と呼ばれる特殊戦法で、一般のプロ棋士を撃破した実績がある。

加藤は大食漢で、あるとき旅館でタイトル戦があったとき、料理を二人前注文した。メイドさんは自分に御馳走してくれるのかと思ってお礼を述べた。ところが加藤が全部平らげてしまったそうである。ド

ッシリした体格から「重タンク」と呼ばれている。加藤は18歳のときA級8段となり、リーグでも優勝して「神武以来の天才」との異名がある。

南は将棋一途な性格で、黙々として盤を見つめ、周囲と雑談を交わすことがない。一日中正座を崩さず両手を後手に組み、沈黙考する。正に三昧境に耽って、棋士の務めを果たしている感じで、それを「地藏流」と称されている。

島には特別なニックネームは付いていない。それだけ個性を殺して、オールラウンドに対応しているのであろう。何といても賞金額最高の龍王戦（主催・読売新聞社）の初代優勝者である。そのうち必ずゴリゴリと周囲を圧倒し、「〇〇流」とプロ仲間から嫌われる時期が到達するであろう。

森下は泥沼棋士とは研究会や私的なことで、付き合いが深い。しかし性格はまじめで対照的である。将棋の古くからの最もオーソドックスな戦法はヤグラであろうが、現代ヤグラは目下日進月歩している。そして現時点での最先端に「森下システム」がある。

森下はリーグ優勝を果たし、羽生名人に挑戦した。しかし第1局は相手玉が3手で詰むという、アマ初心者にもすぐ分かる事実を見落として敗れた。A級の大先生方が羽生と戦うと、信じられないようなミスをしてしまう。まるで夢遊病者のような魔術ということで「羽生マジック」と呼ばれている。

以上が各棋士の世間に認知された特徴である。

3. 「銀」と「桂」の負の相関について

分析を進めると「銀」を多用する棋士と「桂」を多用する棋士に分かれることがわかった。そのことを予備知識として、説明しておく。

図1はヤグラ戦法の部分図であるが、ここで「3五歩」と攻めると図2のように反撃されて、桂が死んでしまう。だから早く攻めるためには桂を跳ねず「3五歩」と突く方がよい。このあたりに銀と桂の負の相関の一因が潜んでいる。

桂を多用する棋士は図3のように飛車で横を守ってから攻める。或いは図4のように銀で桂の頭を守って、むしろ桂を先陣に攻撃を仕掛けてゆく。すると結果的に銀と桂の使用頻度が、戦法によって異なることになる。

銀を使って早く仕掛けるタイプでは、端歩を突いて香を活用する機会が多い。だから銀を多用する棋士は香も多用する傾向にある。反対に桂を多用する棋士は、飛車もよく動かしている。

表2 A級棋士のプロフィール

棋士名	棋風	備考
米長 邦雄	泥沼 流	性格は「さわやか流」
谷川 浩司	前進 流	光速の寄せ
中原 誠	自然 流	
高橋 道雄	地道 流	
有吉 道夫	火の玉流	
塚田 泰明		塚田スペシャル
加藤一二三	重タンク	神武以来の天才
南 芳一	地藏 流	
島 朗		
森下 卓		森下システム



図1 「3五歩」と指すと？



図2 桂馬が死ぬ



図3 飛車で桂頭を守る



図4 銀で桂頭を守る

図5は「森下システム」の部分図であるが、飛車と銀と桂と香となにもかも活用してしまおうという、最先端の手法である。但し相手があることだし、速度関係が絡んでいるから、取捨は難しい。

それでは銀を多用する棋士と桂を多用する棋士が激突したらどうなるのか？ それは一口には言えないが、駒組みは図6のようになるだろう。

4. インプット・データの作成

主成分分析法で最初キー・ポイントとなるのは、インプット・データの作成である。この作り方によって、分析結果がほぼ左右されるからである。

サンプルは10人の棋士だから、 $n = 10$ である。問題は変数であるが、8種類の駒を動かした回数を取り上げる。それと総手数(自分の方だけ)、また基本戦法として、居飛車1点・ひねり飛車やヤグラ振り飛車2点、純振り飛車3点とした。

駒を動かした回数は各棋士とも、9対局の平均値とした。これらの資料は将棋部員が文献1を根拠に手分けして作成した。変数はこれで十分とも最善とも確信はないが、とりあえず作成した結果が表3である。変数は10種類 ($p = 10$) である。

単純に表3を眺めて気がつくことを述べてみる。先ず桂の回数は中原がトップであること。「中原の桂馬使い」は棋界では有名な話である。次に基本戦法であるが、飛車を全く振らない棋士が半数以上であ



図5 全ての駒を躍動させる

ること。またいつも振り飛車とする棋士はいないことが分かる。

それから玉=王様の回数に着目して頂きたい。降級した塚田と南は7ポイントを上回っている。つまり戦局が苦しくなると、王手で迫られ、玉が逃げ回ることになる。逆に勝つ方は玉はあまり触ることがない。泥沼棋士は「玉を平均7ポイント以上触ると降級」ということは、これまで誰も指摘したことが

ない重大事実」だと、本文の研究成果を一応認めた恰好である。

さて、いわゆる「人間の常識」の線で表3を考察出来るのは、この程度ではないか。それでは本文の主題である主成分分析法を駆使すると、この後どんな事実を引き出すことになるのであろうか。

5. 主成分分析結果の考察

表3のインプット・データに基づく主成分分析結果を考察する。まず固有値と寄与率は表4のとおりである。一般に固有値が1より小さい主成分は切捨てる。大きいものほど重要ということで、本文では第1と第2主成分に着目することとした。二者の累積寄与率即ち信頼度は60%である。つまり2個の主成分によって、本題の6割程度を説明できるということである。

次に因子負荷量を表5に示す。因子負荷量とは主成分スコアと変数の相関係数であって、一種の感度と考えればよい。つまり感度の高いいくつかの変数を組み合わせ総合すると、主成分の持つ意味合いを解読できることになる。



図6 「銀型棋士」と「桂型棋士」の対決布陣

表3 棋風評価のためのインプット・データ

変数 棋士	歩の 回数	香の 回数	桂の 回数	銀の 回数	金の 回数	玉の 回数	角馬 回数	飛竜 回数	総 手数	居飛 振飛
米長 邦雄	21.6	1.2	4.6	9.3	6.5	4.2	5.7	6.8	60.0	2.1
谷川 浩司	20.4	1.6	3.0	10.8	8.2	4.7	9.7	9.8	68.2	1.3
中原 誠	20.3	1.4	5.3	10.1	7.4	4.2	10.0	6.2	64.9	1.5
高橋 道雄	23.3	2.2	4.3	12.4	7.6	5.8	9.1	7.3	72.0	1.1
有吉 道夫	19.0	2.4	3.6	11.4	7.2	5.4	6.1	4.1	59.2	1.5
塚田 泰明	21.4	1.5	3.8	8.3	6.3	7.1	6.1	7.7	85.0	1.4
加藤一二三	17.1	2.4	2.4	11.5	7.7	6.3	7.5	5.6	60.5	1.0
南 芳一	18.3	1.7	2.8	10.6	6.4	7.2	6.1	4.1	57.2	1.1
島 朗	20.6	1.7	2.2	9.7	6.8	6.7	9.8	5.8	63.3	1.2
森下 卓	20.5	2.0	4.1	12.5	7.4	6.2	7.1	5.0	64.8	1.0

表5より第1主成分は「銀・香・玉の活用が少なく桂・飛車の活用が盛ん」と読み取れよう。その反対は「銀・香・玉の活用が多く桂・飛車の活用が少ない」となる。泥沼棋士はこれらを要約し、前者を「桂型棋士」後者を「銀型棋士」と名付けた。

図7に主成分スコアの散布図を示す。横軸は第1で縦軸は第2主成分である。図7で最右翼の「桂型棋士」は泥沼棋士で塚田・中原が続く。「桂馬の中原」が右端でないところが、この手法の興味深いところである。本論は10次元の世界なのである。

反対に「銀型棋士」の代表は最左翼の加藤である。以下南・有吉・森下とヤグラ正当派が続く。表現を変えれば、左翼が正当派で右翼が変化球派とも言える。泥沼棋士はいう。

「米長・加藤が性格真反対であることは有名な事実である。性格も棋風も反対である。図7はそれを見事に指摘している」

注釈を加えると、加藤は敬虔なクリスチャンであり、棋風は棒銀思考に徹している。一方泥沼棋士は競馬やゴルフでテレビ・週刊誌を賑わせ、女性タレントとの出演も頻繁で、棋風は飛車をノラクラさせたり、桂馬をコソコソ使いながら、相手を徐々に攻略している。全く正反対である。二人とも強いから対戦回数は多いが、泥沼棋士はある席上で「貴殿と顔は会うが気は合わない」と明言している。

なお「森下システム」の森下は表3によれば、角の使用が7ポイントで飛車が5ポイントである。ということは定説どおり「ヤグラは飛車でなく角が主役」であることを物語っている。

次に表5の因子負荷量で第2主成分をみると、感度として「飛車・角・金・銀」が共通した符号で示されている。「銀型棋士」と異なる点は、飛車と金が新たに加わったことである。図7の散布図をみると、最下方に谷川がいる。これは想定であるが、まず銀を突進して、敵銀と交換する。その銀を敵陣に打ち込んで、守備の金を剥がす。飛車が敵陣に成り込んで竜となり、暴れまくる。これは谷川の将棋そのものである。

では第2主成分は一口でいうとどうなるのか？ 筆者にはなかなか思い当たらないが、泥沼棋士が指摘してくれた。

「要するに快調に相手を攻めるとのことだ。図7をよく見ると、勝ち越し組が下半分に、負け越し組が上半分に散布されている。だから下方を『快調攻撃』上方を『不調防戦』としてはどうか」

但し一人泥沼棋士だけが例外で、6勝3敗と勝ち

表4 各主成分の固有値と寄与率

主成分	固有値	寄与率	累積寄与率
第1	3.488	34.9 %	34.9 %
第2	2.510	25.1	60.0
第3	1.788	17.9	77.9
第4	1.088	10.9	88.8
第5	0.563	5.6	94.4

表5 因子負荷量 (○印注意)

変数	第1主成分	第2主成分
歩の回数	0.675 ○	-0.327
香の回数	-0.828 ○	-0.220
桂の回数	0.628 ○	-0.189
銀の回数	-0.667 ○	-0.532 ○
金の回数	-0.293	-0.905 ○
玉の回数	-0.519 ○	0.460
角馬回数	0.042	-0.771 ○
飛竜回数	0.588 ○	-0.553 ○
総手数	0.456	-0.172
居飛振飛	0.772 ○	0.275

越しながら、上半分にいる。ということは、勝ちパターンが谷川とは全く異なるということである。泥沼棋士は「自分の将棋は柔道でいえば寝業だから、本来なら4勝5敗くらいで負け越すのが普通。勝てるのは相手が自分より未熟なため」と分析する。

図7で最上方は南である。泥沼棋士は更に言及する。「谷川は華やかなスピード将棋で、花でいえばユリではないか。南は地味で徹底的に粘るタイプ。どっしりしていて、花ならツツジだろうか。二人の棋風は正反対でこれも有名な事実だ。それを上下にうまく振り分けている」と、再び感心して頂いた。

という次第で本題の分析はまずまずの結果が得られたと解釈したい。

6. 勝局敗局と総手数の関係

将棋の対局をするとき、「相手はなかなか手ごわそうだ」と感ずるのは、何を根拠にしているのだろうか？ 月並みな考えでは、過去の実績であるとか、最近の勝率、個人的な相性等があげられる。

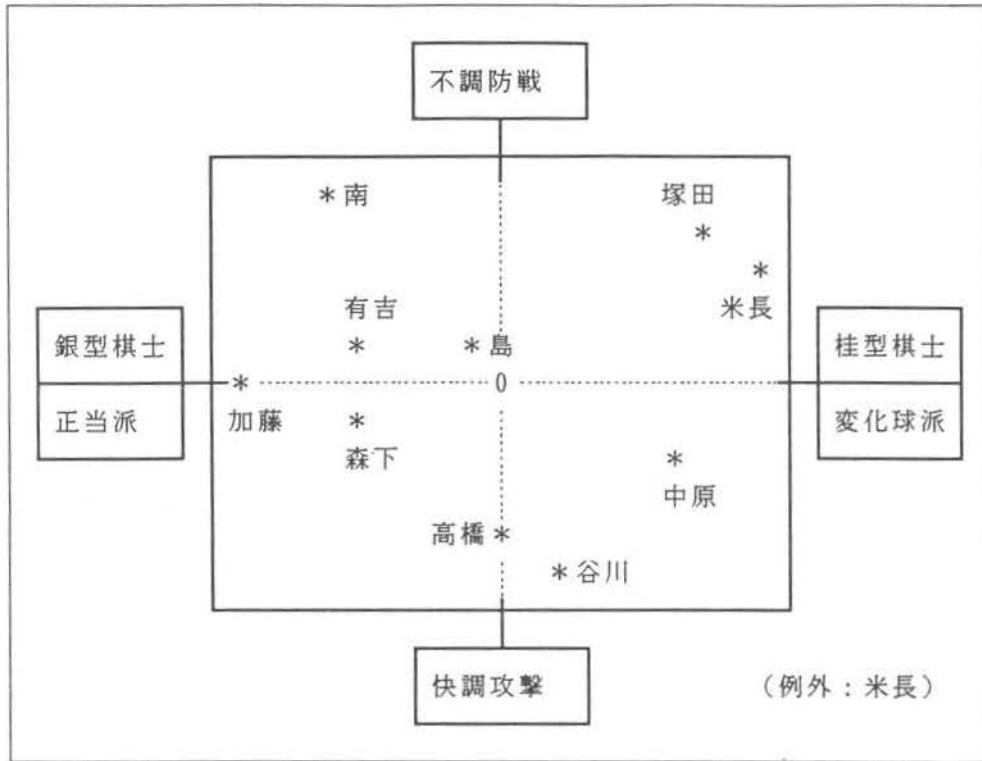


図7 各棋士の主成分スコア散布図

本文では一案として、勝ったときの手数と負けたときの手数を比較してみることにした。つまり勝つときは短手数で鮮やかに寄り切り、負けるときはなかなか決め手を与えず、長手数で粘り抜く。こんなタイプの棋士こそ、相手に威圧感を与える手ごわいプロではないかと思われるのである。

表6は順位戦9局のうち4勝以上をあげた7名の棋士に関し、勝局と敗局の平均手数（相手の分も含む）及びその比率を示している。表6によれば手数はバラバラで、順位や勝ち数とはあまり明確な相関は無いように思われる。

次に勝局と敗局の双方の手数の比率を大きさの順に並べたのが、図8である。この傾向が最も顕著な棋士は谷川である。とにかく勝つときは短手数で、負けるときは長手数というから、簡単には勝たして貰えない相手として、プロ仲間では認識されているものと思われる。谷川のニックネームである「光速の寄せ」は、こんなデータでも証明されている。

谷川に続く棋士は高橋と島であるが、少し意外な感じがする。順位とは関係ないようだ。ただ高橋はまじめな「地道流」だから、不利な将棋を徹底して粘り抜くことは想定できる。中原と泥沼棋士の両名人経験者は丁度平均値である。おそらく鮮やかに勝つことよりも、確実に寄せることを信条として、淡々

と指しているのであろう。

逆の指標で最も苦勞しているのは加藤であるが、特別の理由は見当たらない。ともかく上位陣が下位陣を短手数で鮮やかに倒すといった、通念的な事実は存在していないと考える方が妥当であろう。

7. まとめ

以上相当な私見を交えての分析ではあったが、いくつかの新事実を発見したりして、まずまずの成果だったと、胸をなで下ろしている次第である。特に

表6 勝局と敗局の手数比較

棋士	勝局手数	敗局手数	比率
米長	124	121	0.98
谷川	115	184	1.60
中原	132	132	1.00
高橋	137	155	1.13
加藤	134	117	0.87
島	111	123	1.11
森下	134	127	0.95

将棋プロ棋士の棋風考察

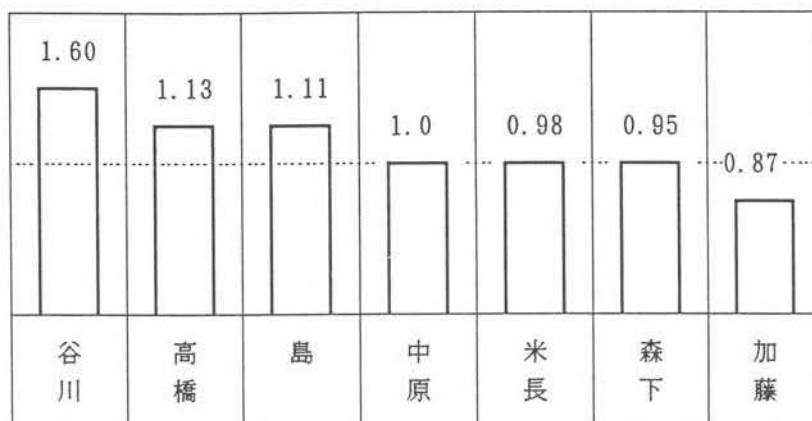


図8 勝局と敗局の手数比率 (敗局手数÷勝局手数)

印象に残った事柄を取りまとめてみる。

- (1) 棋士の棋風は「銀型」と「桂型」に大きく分類される。前者の代表が加藤であり、後者の代表が泥沼棋士と中原である。
- (2) 対局システムが総当たりのリーグ戦である以上は半数が勝ち半数が負ける。従って「快調に攻めて勝つ組」と「苦戦して防戦する組」に分かれることは必然の結果であろう。前者の代表が谷川であり、後者の代表は南である。

泥沼棋士は今回の分析に関し、次のようなコメントを寄せてきた。

「将棋界では『加藤 vs 米長』『谷川 vs 南』は性格と棋風がまるきり反対であることは、周知の事実である。それを図7に明示できたことは、この分析の信頼度が非常に高いことを示している。

次に局面が不利になると、当然玉を追い回される

ことになる。玉に触れる回数が7ポイントを越えると赤信号というのは、大発見であろう。」更に「羽生名人と表1の10人の対局を1局ずつ無作為に取り上げ、11人の分析としたら、羽生名人は図7の散布図のどのあたりに位置するのであろうか。図7を81区画に細分して、将棋専門誌にクイズとして提示したら、ファンは喜ぶだろう。」

最後に53期順位戦で不本意な結果となった先生方には失礼極まりない文体となってしまったが、勿論他の棋戦では全員が素晴らしい成績をあげておられることを報告し、お詫びの言葉とさせて頂きたい。

参考文献

- 1) 日本将棋連盟編 平成7年版 将棋年鑑 p 92~119 日本将棋連盟 1995.7.